

世界史

【採点基準】

第1問 20点 (28点)

波線部はその加点部分の必須要素。

〔18世紀後半〕 4点

- ・第二次英仏百年戦争に勝利して北米・インドの覇権を掌握 1点

- ・13植民地の独立により、植民地支配の重心を北アメリカからインドに移す 1点

- ・この頃は重商主義の帝国であったこと 1点

- ・産業革命が準備されたこと 1点

〔19世紀前半～半ば〕 6点

- ・ナポレオン戦争（革命戦争）に対仏大同盟を率いて干渉①、大陸統合を阻止① 2点

- ・ウィーン体制下で列強の協調体制の中心となる or 海外領土獲得 1点

- ・クリミア戦争に参戦してロシアの南下政策を防ぎ①、以後「光栄ある孤立」をとる① 2点

- ・「世界の工場」として全世界に自由貿易を強制 1点

〔19世紀末～20世紀初頭〕 5点

- ・アメリカ（やドイツ）で第2次産業革命が本格化 or 大不況に直面 1点

- ・イギリスは「世界の銀行」へと転換 1点

- ・アフリカ分割に参加 1点

- ・日英同盟締結で「光栄ある孤立」を放棄 1点

- ・ドイツへの対抗のため三国協商を形成 1点

※ 波線部は「光栄ある孤立」の放棄でも可〔二度の世界大戦〕 7点

- ・国力低下に対応し①、ウェストミンスター憲章を制定して①自治領に主権を持たせ①、帝国をイギリス連邦へと再編① 4点

- ・世界恐慌に対応してブロック経済を形成 1点

- ・ナチス＝ドイツには宥和政策で対応したが失敗 1点

- ・大西洋憲章を発表して戦後秩序を構築 1点

〔20世紀後半～21世紀〕 6点

- ・第二次世界大戦の疲弊により①、冷戦の主導権（戦後の覇権）はアメリカに① 2点

- ・植民地の独立で帝国の解体が進む 1点

- ・ヨーロッパの経済統合にはEFTAを結成して当初は対抗①、後EC加盟① 2点

- ・21世紀には外国人労働者の流入問題等を受けてブレイグジットに至った 1点

第2問 (20点)

(1)(a) 4点 (5点分)

- ・前漢の武帝が張騫を大月氏に派遣 1点

※ 波線部は全て必須

- ・対匈奴の同盟交渉には失敗したが①、西域事情が中国にもたらされた① 2点

- ・武帝は匈奴を討伐して西域支配を本格化 or 河西四郡（敦煌郡）の設置 1点

- ・李広利の大宛征服 1点

(c) 5点 (6点分)

- ・明は（前期）倭寇対策 or 冊封体制再建のため①、海禁を実施し、朝貢貿易のみを認めた（民間貿易を禁止した）① 2点

- ・明後期には海禁を緩和したことで①、その理由・背景（後期倭寇の活発化等）① 2点

- ・清は、鄭氏台湾の財源を断つために海禁を強化（遷界令を発令） 1点

- ・鄭氏の討伐後に海禁を緩和して民間貿易（互市貿易）を認めた 1点

(2)(a) 3点

- ・サハラの岩塩と①、ニジェール川流域で産出された金①を交換する貿易 2点

- ・ガーナ王国の明示 1点

(3)(a) 3点

- ・ジャワ島では政府栽培制度（強制栽培制度）を通じて①、商品作物栽培が広がった① 2点

- ・タイ（ラタナコーシン朝）では輸出向けの米の生産が拡大した 1点

(b) 3点 (5点分)

- ・開発独裁の明示 1点

- ・開発優先で独裁を正当化したこと 1点

- ・外資を積極的に導入 1点

- ・輸出産業の育成に特化 1点

- ・労働運動を弾圧して安価な人件費を維持 1点

【概評】

時系列を意識して解答を作成しよう

今回の東大ブレは第2回ということもあり、夏の第1回と比べると受験生の平均的な知識量や文章力の伸張が著しく、成長を感じた。今後も本番まで学習を積んでいってほしい。その上で言えば、今回の第1問や第2問の間(1)(c)では、時系列や時期の切り替わりの理由・背景を軽視した解答が目立った。世界史の論述は地域的または時間的に広く、その過程や事象の理由・背景を問う問題が多い。この場合、自分では正確な事実を解答として提示しているつもりでも、時系列が誤ってい

たり、読み取りにくかったりするものは加点されない可能性が高い。特に今回の第1問のように出題範囲が数百年に渡る問題を解く際には、単調な事実の羅列になるのを避けて、時系列や時期の切り替わりの事象に注意した解答を作成することに気をつけられると、よりよい解答を作成できるだろう。

なお、世界史の知識を高度に習得できている一方で、多くの受験生の答案で一般名詞の誤字が非常によく目立った。模試でも本番でも大きく減点はされない部分だが、採点者への心証は悪く、間接的な影響が出る可能性がある。十分に注意して論述の解答を作成してほしい。

第1問

18世紀後半から現在までの大英帝国の盛衰を出題した。冒頭にも書いた通り、時系列が正しいか混乱しているかで出来に大きな差が生じた。時代別に見ていくと、18世紀後半では、この時点で産業革命が完成して「世界の工場」になったとして指定語句を処理してしまっている解答が多かった。イギリスの産業革命はイメージに反して緩慢であり、インドとの綿布の輸出入が逆転したのは1820年頃になってやっとである。大論述対策として時代の感覚をつかんでおきたい。13植民地の独立によって植民地支配の重心が移動したことに触れている解答はかなり少なかった。問題文の第1段落の指示がよく理解できなかったのかもしれない。高得点の鍵は指定語句ではなく第1段落の読解にある。手を抜かず精読してほしい。

19世紀前半～半ばでは、ウィーン体制が勢力均衡と正統主義を原則としたこと等のように、史実として正しいものの問題の趣旨にそぐわない記述を書いて、字数を浪費した答案が多かった。第1問では問題の指示に沿った事項の取捨選択が最も重要であることを肝に銘じたい。同様の事情によりクリミア戦争や「世界の工場」も上手く処理できた答案は少なく、問われていないイギリスの外交政策について字数が費やされていた。また「南下政策」について「南化」という誤字が散見されたので注意を促しておく。

19世紀末～20世紀初頭では、第2次産業革命の影響による「世界の銀行」への転換を指摘できた答案が少なかった。そもそもウィーン体制が崩壊した後すぐに日英同盟に話題が飛んで、1860～90年代について記述が全くない答案も少なかった。「世界の工場」が指定語句になっていることから「世界の銀行」を想起できてほしい。

「光栄ある孤立」は「栄光」と書いてしまっている誤答が目立った。日英同盟の締結で孤立主義を放棄したことはよく書けていた。

二度の世界大戦では、イギリス連邦への再編は高得点答案に限るとよく書けていたので、本問の代表的な差がつくポイントだったと言っていい。ブロック経済の実施も同様である。指定語句の宥和政策は第二次世界大戦の要因の一つになったことまで書けていて加点としたが、因果関係が明確でない答案が多かった。もう一つの指定語句の大西洋憲章も大戦後の制定とする誤解が蔓延していた。

戦後については全体的に出来がよく、時事的な内容も含めてよく理解されている様子が見受けられた。その中ではEFTAとECSC・EEC・ECの取り違えがしばしば見られた。特にEFTAの創設はECに対抗したものとする誤解が多かったが、EFTAの創設はEECに対抗したものである。ヨーロッパ統合も意外と複雑なので、間違えた受験生はこれを機に整理して覚えておこう。

第2問

問(1)(a)は前漢の武帝の西域政策を出題した。典型的な出題なので得点率が高いかと思われたが、意外なほどに受験生の苦戦が見られた。まず、前2世紀後半という指定に反して秦の始皇帝や後漢の班超・甘英について述べていたり、各君主や主要人物の事績を混同したりしていた。このため多くの0点に終わった答案も多い。前漢の武帝ということは特定できていても、張騫の「騫」の字が間違っていたり、同盟交渉を持ちかけた国が大宛となっていたりといった知識的なミスが目立った。古代史はすでに忘れていた受験生も多そうである。本番までによく復習しておいてほしい。(b)の「ソグド人」は正答率が高かった。(c)は明清期の貿易等政策について出題した。予想されていたことではあるが、明の前期・後期・清と鄭氏台湾の対立期・鄭氏台湾討伐後の4期に分けて記述すべきところ、明の前期からいきなり清に飛ぶ解答が多かった。また切り替わりの背景について、最後の鄭氏台湾討伐については正確に記述できている答案が多かったが、その他の時期については倭寇の前期・後期が区別されていなかったり、鄭和の大遠征をもって海禁が緩和されたことにしたりといった誤答例があった。今回は甘めに採点したが、本番では前期・後期の区別がついていない倭寇は加点されない可能性がある。明清は東大では頻出のテーマであるので、満点がとれなかった受

験生は時期と背景を結びつけて復習しておこう。

問(2)(a)は9～11世紀という時期指定からガーナ王国を特定した上で、塩金貿易を説明する問題であった。複数国が挙げられていた場合は、ガーナ王国と並べられているのがマリ王国・ソンガイ王国であった場合のみ加点し、それ以外の国は加点しなかった。この国の特定でつまづいた解答が多く、マリ王国やソンガイ王国だけを挙げていたり、ムラービト朝・ムワッヒド朝・アクスム王国やモノモタパ王国といった他のアフリカ地域の国を挙げていたりした解答が見られた。貿易の内容はよく書けていた。誤答では、ニジェール川流域の産物を金ではなく象牙や黒人奴隷としたものが見られた。(b)「キャラヴァンサライ」は60%程度の正答率で、誤答は「キャラヴァン」が多かった。

問(3)(a)は19世紀の東南アジア内貿易について出題した。ジャワ島で行われた農業が政府栽培制度(強制栽培制度)であることや、商品作物が栽培されたことはよく理解されていた。商品作物はコーヒーやサトウキビ等の具体例でも加点としたが、天然ゴムは時期が異なるため加点しなかった。また、天然ゴムを挙げた解答はマレー半島での農業と勘違いしていた様子のもが多かった。一方で「大陸部の独立国」という指示からタイの稲作を指摘する必要があり、こちらも大半の受験生は正解できていたが、独立国の指示を上手く飲み込めずにフランス領インドシナを挙げていたものや、根本的に時代を勘違いしてアユタヤ朝を挙げていたもの、稲作ではなく芋類の生産としたもの等も見られた。(b)は開発独裁を説明する問題であった。問われているものが開発独裁であることは多くの受験生に理解されており、外資の導入も書いている答案が多かった。しかし、知識的に追いついておらずそこで解答が止まっており、輸出指向型の工業化であったことや、民主化や労働運動の弾圧で低賃金を達成していたことにはあまり触れられていなかった。

第3問

問(1)「ペリオイコイ」は60%弱の正答率で、やはりヘイロータイという誤答が多かった。隷属民と半自由民の区別をつけておきたい。問(2)～(4)はいずれも正答率が80～90%程度と高い。問(5)「ミット」はズィンミーや啓典の民といった惜しい誤答が主であったが、ウンマ・デヴシルメ・マワリーなど多様な誤答が見られた。また「ミナレット」という誤答も見られた。似た言葉にも

混ざらないように注意を払っておきたい。問(6)「太平天国の乱」は、19世紀半ばという指定を読み落とした受験生が多く、白蓮教徒の乱という誤答が目立った。東大の第3問ではこの種のミスが最も多い。第3問だからこそ問題文はじっくりと読んでほしい。問(7)「フセイン(フサイン)」は70%程度の正答率と悪くないが、「マクマホン」という誤答が最も多かった。マクマホンはイギリス人側の名前である。明確に覚えていなくても、個人名から民族名をある程度推測できるようになっておくとういかもしれない。また、サダム＝フセインという誤答も少なからず存在した。フセインはアラブ人にはよくある名前であるが、区別しておきたい。問(8)「ゲルニカ」は高い正答率が期待されたが、60%程度にとどまった。誤答はバルセロナやマドリッドといった他のスペインの都市や、カタルーニャといった地方名が目立った。問(9)と問(10)は正答率が低く、50%に届かなかった。問(9)「国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)」の誤答は「高等」を欠くものや、事務所が「機関」となっているものが多かった。他の機関ではユネスコやユニセフが挙げられていた。略語の「UNHCR」でも正解であるが、こちらを答えた受験生は想定よりも少なかった。漢字指定でない限りは略語で答えてもよいので、正式名称がうろ覚えであるなら略語に頼ってほしい。問(10)「ジョンソン」はケネディやアイゼンハワーという誤答が多かった。